

報徳博物館

友の会 だより
No.69

国際二宮尊徳思想学会

「中国東北・二宮尊徳研究センター」
設立式及びフォーラム

去る3月26日(土)、中国・大連民族学院(大学)において、同大学並びに国際二宮尊徳思想学会主催の標記行事が開催されました。

わたしたち日本側の出席者は、学会理事長の草山昭報徳博物館長を団長に、途中合流者を含めて総勢31名、中国側は、学会会長の劉金才教授はじめ大連民族学院の蔡明徳院長以下学生を含めて約90名、来賓として、中国駐在潘陽領事館大連事務所領事吉野隆敏氏・尊徳先生玄孫で学会顧問二宮精三氏・大連市社会科学連合会副会長冷一彬氏・遼寧師範大学副学長曲維氏・三菱電機大連機器有限公司総経理西田直樹氏らをお迎えし、真に盛大にして意義ある催しでした。簡単ですがその模様をご紹介します。

◇報徳の使節団、大連へ翔ぶ(25日)

大連や旅順のある遼東半島は、かつては「関東州」と言った大変馴染み深い所ですが、緯度的には岩手県辺りで可成りの寒さを覚悟して行きました。でもそれ程寒さを感じず、天候にめぐまれた訪中でした。設立式とフォーラムは翌26日でした。



◇二宮尊徳研究センター設立式・フォーラム

大連民族学院の図書館3階の大教場で開催。開会の言葉(挨拶)は、劉金才会長・大連民族学院



蔡明徳院長・同学院国際言語文化研究センター長王秀文氏らから。この後「二宮尊徳研究センター」プレートの除幕式に続いて、草山館長より蔡院長に本館からの貴重な文献贈呈(下写真)が行われました。今後中国での尊徳研究の飛躍が期待されます。



引き続いて来賓各氏の挨拶・記念撮影、そして劉会長と草山館長の基調講演「二宮尊徳の報徳理念と実践」と午前中の予定は順調に進みました。

午後は基調講演と同一主題で二組のパネルディスカッションの後閉会式に移りましたが、曲 維副学長は次の様な言葉で締めくくられました。



- この会で旧友だけでなく新しい友人を得た。
- 12名の発表は、三農問題解決の大きな力となる。
- 研究センター設立で、尊徳再認識の力を得た。
- 貴重な資料を頂き、今後の研究の力となる。

続いて日本側から下荒地勝治常務理事が、「わたしは従来、本学会の進むべき道は、5W+2Hということ saying していたが、循環と一元融合の方向が不可欠ということに気付いた。つまり連携の大切さである。当地大連は正に大きく連なるということ、そこで“5W2H大連”をスローガンとしたい」と結び、大きな拍手で一切を終了しました。

◇市内観光(25・27日)とショッピング(28日)

人工580万の大連は近代的高層ビルが林立しているが、帝政ロシア時代や日本統治時代の古い建物も残るエキゾチックでレトロな雰囲気のある街です。

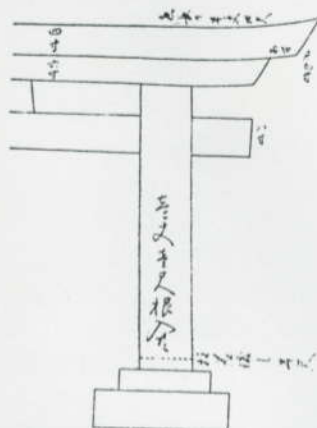


郊外には、旅順口・203高地・東鶏冠山・水師營会見所、市街地には旧日本人街・旧満鉄本社・旧ヤマトホテル・旧横浜正金銀行など、日本人、特に十数年前の少年少女達にとって大変魅力的な土地で、来年の第3回学術大会が楽しみです。

調査・取材ノートから

◇大山阿夫利神社参道二の大鳥居

『二宮尊徳全集』第8巻（書簡集）の中にちょっと変わった記事があります。「鳥居柱割合」という見出しで、下の様な図面を付けた「木之鳥居



積り書」が記載されています。

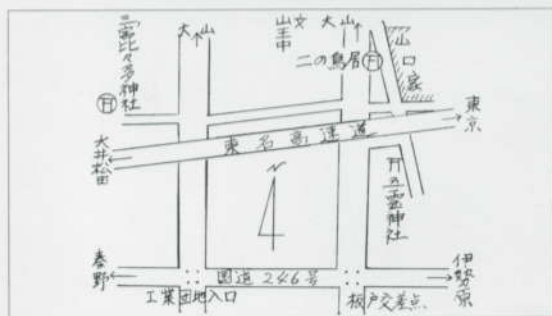
さらにこれに続いて「覚」として「大山石尊大権現鳥居積り書」があります。

こちらには図面はありませんが、前者の木の鳥居よりずっと詳しく本体や沓石・額などの各

部のサイズの外に、資材の産地や諸費用・輸送方法、業者名までも記されています。その上鳥居建立の場所が「相州大住郡上粕屋村之内、字七五三引村」とあります。粕屋という所は現伊勢原市の内、大山の麓です。

実は尊徳は、嘉永4年(1851)12月28日から翌5年正月にかけて、伊勢原に近い片岡村（平塚市）の大沢小才太方に滞在し、正月2日には小才太の案内で、門人らを引き連れて大山石尊と三之宮比々多神社に参詣していますから、尊徳がこの鳥居建立に関わっているのかも知れない、との思いで早速現地へ調べに行きました。

国道246号線の板戸交差点を左折北上して約1kmで、従来からあった県道大山上粕屋線との合流点の三角形の地に大きな御影石の鳥居が建っていました。しかもその脇には、「大山阿夫利神社参道



二の大鳥居」の看板もあり、一見してそれと判かるものでした(一の鳥居は藤沢)。しかも、「嘉永四歳辛亥冬十月再建」と彫ってあります。しかし、両柱下部に彫られている多数の再建関係者名の中に、尊徳の名は見えませんでした。



ところで、この七五三引という地名、たしかにこの辺りの地名だそうですが、昔から大山石尊の祭礼には、人々は近くの弁天池の清水で水垢離をして心身を清め、この鳥居に七五三縄を引いて神を祀り、精進潔斎を守って来た、そんな所がこの辺りだった、それが地名の起こりなんだそうです。

ところが、約150年前のころ、鳥居が長い年月の間に立ちぐされ朽ちてしまったので、地元の名主や組頭ら有志が、幕末の国情騒然とした嘉永4年に、天下泰平・国土安穩を願って、普通りの再建を図面を添えて申し出て再建されたわけです。

でも、なぜ『全集』嘉永5年正月の書簡集に？

前述のように、この時期尊徳は、大山に参詣しておりますが、当然この鳥居をくぐっているだろうし、再建の資金集めには相当な苦労もあった様ですから、尊徳はそんな話も聞いたのかも知れません。そんなことで感心し、あるいは何かの参考にもと考え、加藤宗兵衛が大沢小才太が誰かに資



平成3年の再建碑

昭和3年の復旧碑

料を送らせてもしたのかなとも考えられます。

さて、この大鳥居、現在地に再建されるまでには多々受難の歴史がありますが、前頁写真の2基の石碑文を要約して紹介します。

①嘉永4年に再建された場所は、現在の場所より200メートルほど南に寄った所の五霊神社前で、大山参道を跨いで建っていた。

②大正12年(1923)9月1日の関東大震災で倒壊、昭和3年(1928)にようやく復旧した。

③昭和38年4月、レッカー車の接触事故で破損し、五霊神社の境内に片付けられたままであった。それを、平成3年に、地元有志が発起人となって古い資料を調べて現在地に再建された。

というわけですが、その用地は、鳥居脇に屋敷のある山口匡一氏が提供されました。

この山口家は土地の旧家で、鳥居再建や復元の時にはいつも発起人の一人ですが、当主匡一氏の曾祖父山口左七郎氏は、明治初期の相州を代表する自由民権家で、大住・洵綾両郡の郡長・神奈川県議会議員・初代衆議院議員を歴任した正に知る人ぞ知るといふ人です。

この左七郎氏は、足柄上郡金手村(大井町)の豪農間宮若三郎の次男で、山口家の養子でした。

彼の実父若三郎は、「金手村若三郎の仕法」として『二宮尊徳全集』第18巻にも登場する人で、弘化2年(1845)12月には、小田原領内の報徳仕法再開嘆願のために出府した領内19名の中にも名を連ねております。そんな父親の後ろ姿を見て育った左七郎は、報徳にも理解があり、又福住正兄とも交流があり、同家には正兄の書簡なども所蔵されて



います。そんな山口家が、地域のために所有地を推譲されたというのも、時空を越えた因縁で結ばれている不思議を感じます。なお、同家の中庭に保管されている左写真の石は、欠損しておりますが「石尊大権(現)」と読み取れます。『二宮尊徳全集』第8巻所収の、鳥居覚え書きにある伊豆石の額だろうと思います。いつの日かしかるべき所へ納まるといいですね。

報徳の広場

◇留学研究生生交替 「再見・さようなら」

北京大学大学院生2人の女性が、昨年からは報徳博物館に留学して、報徳の研修に励んでいたことは皆様ご存知のことですが、1年が経過して、周冬梅さんは帰国しました。先日の大連での二宮尊徳研究センター設立式では通訳を任せましたが、後日、今後はカナダへ留学するそうです。

もう一人の崔嵐さんは、向学の念己み難く、期間を3か月延長して研修を続けます。現在一時帰国しておりますが、この「たより」がお手許に届くころには、新しい留学生の于丹さんをつれて再来日します。「請多多關照・どうぞよろしく」

◇中国絵画の大作

「尊徳 成田山參籠之図」寄贈される

去る1月16日(日)に本館地下展示室において中国の新進画家林岬明画伯が、標記の絵を実演され、見学された方も大勢おいででしたが、その絵を本館にご寄贈頂きました。さすがに、現代中国水墨画展で外務大臣賞に輝いた人が精魂こめて描き上げただけに、不動明王の前で断食修行に勤める尊徳の様子を彷彿とさせる迫力ある力作です。

早速、裏打ちして額装し、博物館の1階ロビーに展示いたしました。ぜひご覧下さい。なお、もう1点頂きましたが、別の機会にご紹介します。



◇新発行図書紹介

『円相図でみる二宮尊徳の思想

—展示パネルの説明—

館長代理 斎藤清一郎 著

博物館で販売しております。定価300円

発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250-0013 小田原市南町1-5-72
電話0465(23)1151・振替00250-6-24450